

のせの教育の魅力を伝えていきます

# 教育長だより



文責 辻 新造

Vol.9

2▷3

2026 Feb. ▶ 2026 Mar.

能勢の里山に山桜が咲き誇り、そこここに春を感じる季節となりました。

今回は、三草山を舞台に繰り広げられている、一筋縄ではいかなかった「農地の再生」と、それを支える人々の情熱についてお伝えします。

## #1 | 地元×関大1中×大阪みどりのトラスト協会



物語の始まりは、三草山のふもと、岐尼神山（こやま）区に広がっていた耕作放棄地でした。見渡す限り背丈を超えるススキに覆われ、大きな木や石が転がっているだけの「草伸び放題の荒地」。圃場整備をしたのに一度も作付されないままの土地でした。ここで作物を育てるなど、当時、誰も想像だにしませんでした。

しかし、この地の可能性を信じた地元の有志、上林俊雄さんと栖間雅信さん、町役場職員がタッグを組み、耕作放棄地を農地に戻して活用していく無謀とも思える挑戦が始まりました。

時を同じくして、関西大学第一中学校（以降「関大一中」）は、生徒たちが大自然の中でありきたりな体験ではなく、体を動かし、生産的な活動ができる学びの場を探しておられました。

大阪みどりのトラスト協会（以降「トラスト協会」）がつなぎ役となり、地元と関大一中による再生活動（能勢プロジェクト）が始まりました。

当時トラスト協会職員であった天満和久氏（農学博士、現貝塚市立自然遊学館博士研究員）から貴重な資料を提供いただきました。資料はこちらからご覧になれます。→[町HPリンク](#)

## #2 | 能勢プロジェクトの様子

16年前、担当教員だった大西隆先生、白瀬隆明先生（現、教頭）から当時の様子をおうかがいしました。

- はじめは、11月、3年生の活動でスタートしました。水路の泥上げなど力のいる作業も多かったです。これらの体験を新しく入ってくる1年生にもつなげるように他の学年にも広がっていきました。
- どの活動も、一人の力ではできないものばかりです。お互いに声を掛け合い、協力して大きな石を運んだり、サツマイモの植え付けをおこなったり、泥だらけになりながら、汗びっしょりなっていく体験は、とても貴重でした。





地元の栖間さん、上林さんに能勢プロジェクトについてお話をうかがいました

- 10年以上、田んぼを遊ばせておくと、田んぼの草や木がほとんど伸びて、荒れ放題になります。そこから、木を切り、草を刈って、燃やしてようやく畑ができるような土地になっていきます。
- 260人の生徒にどんな作業してもらうかの段取りは大変で、獣害柵を張るときは、大勢の人に来てもらいと本当に助かりました。マンパワーのすごさに、いつもびっくりしています。
- 圃場整備をしても、減反政策で作付けできないときは、山に近い田んぼから順に遊休農地にしていったので。遊ばすと後が大変になる。トラスト協会や生徒さんたちが来てくれて本当に助かった。

- いつも能勢を後にする生徒の笑顔が素敵なんです。農業の大変さを身をもって体験し生徒たちは、能勢の遊休農地が美しくよみがえることに意義を感じているように思います。

関大一中のホームページには、この活動が記録されており2009年（平成21年）から現在まで活動が続いていることが分かります。

その活動内容は[学校ホームページ](#)でご覧になれます。

- 生徒たちがいつも260人ぐらい来てくれる。イノシシやシカの害から守るために網を設置したときは、一人3本から4本、持ってきて何百本近い支柱を一気に立てることができて、作業も大変はかどりました。
- こちらは、毎年、1歳ずつ年をとるけど、中学生は入れ替わっていくので、年をとらない。だんだん年齢を重ねてきて心配するけど、能勢に多くの人に来てくれることは、本当にうれしい。これからもできる限りがんばりたい。

荒れ地だった場所が、活動を重ねるごとに田んぼの景観に変わっていく様子に大きな喜びを感じておられました。

### #3 | 感謝の気持ちをお伝えする

昨年11月に、かねてよりうかがっていたこの活動を見学することができました。地元の方々、有志ボランティアの方、トラスト協会職員の指導の下、「サツマイモ班」「田んぼ班」「水路班」「石畳班」など、それぞれの役割に分かれ、泥にまみれながらも懸命に作業に打ち込む姿が印象的でした。

関大一中の生徒たちが毎学期ごとに学年を入れ替え、1年に1回は能勢町に訪れます。そんな息の長い活動を神山地区で、今でも続けてられています。

朝、吹田にある学校からバス6台に分乗し、午前、午後と作業を行う活動を16年間も続けてこられた継続性とその歴史に驚きました。



広範囲にわたる神山の学びのフィールドをくまなく見学させていただき、活動終了後、生徒たちの前で挨拶する機会を与えていただきました。

今日、作業していただいた現役生徒と教職員のみなさんへ。これまで関わっていただいた先輩の方々へ、町民を代表して感謝の気持ちを伝えました。そして、卒業してからも能勢とのご縁を大事にして、また、三草山に訪れてほしいと伝えました。

この時の様子は、[大阪みどりのトラスト協会HP](#)に掲載されています。



## #4 | 「帰りたくなる場所」を共に創る。能勢プロジェクトを彩る地域の絆



地元の上林さん、城好会（※1）の方々の献身的なサポートが大きな支えとなりました。山あいで活動は、体が冷えることが心配されることから、活動当日、城好会有志の女性メンバーによる豚汁などの炊き出しが行われてきました。また、収穫したお米を大きな釜で炊いて、生徒と一緒に城好会のメンバーがおにぎりを作られたこともありました。

毎回、大型バス6台でやって来る約260人の生徒たち。城好会や地元神山地区のご理解とご協力がなければ、到底できない活動です。

温かいサポート体制が、この「能勢プロジェクト」の参加者の一体感を高める大きな力となりました。

お隣の長谷地区に移住された若手農業者が、神山地区で営農を始められるなど、この地が農地であり続けるための新たな動きが生まれています。

担い手不足は深刻ですが、能勢の農地や山林には大きな可能性があります。今後は「草刈り、田植え、稲刈り」や「祭り」、「自然の回復」を支える活動など、**第2、第3の能勢プロジェクトが各地で誕生することを期待しています。**



今回は、城好会の中心メンバーである乾栄次さんが、三草山登山道の石畳整備を指導してくださいました。2018年の西日本豪雨で被害を受けた登山道を復旧させるため、乾さんは毎年、生徒たちに石畳を整備する技術を伝えてくださっています。

乾さんは生徒たちに、「石畳をイメージする前に石垣を思い出してください。」

「石の形を1つ1つよく見て、平らな面を表面出して、土を掘り返し、すき間ができないように・・・」

「友達と力を合わせて」と。

自然の尊さと厳しさを、理屈ではなく熱量として生徒たちの心に刻み込んでいくように感じました。

### ※1 城好会(じょうこうかい)

この会の名前には、深い由来があります。かつて岐尼小学校で教鞭を執られた故・田和好(たわ よしむ)先生(※2)を慕う保護者たちが、卒業後も先生との絆を大切にしようと、先生の名から一字「好」を取り、能勢の「城」と合わせて名付けたのが始まりです。

長年、能勢の山々や名所旧跡を巡る活動を続けてこられた同会は、近年では大きな社会的役割も担ってこられました。大阪みどりのトラスト協会とともに、三草山に生息する希少な蝶「ゼフィルス」を守る活動の中心的役割を果たしてこられたのです。半世紀もの間、能勢の自然を愛し、次世代へつなごうとする城好会の皆様の真摯な活動に、心より敬意を表します。

### ※2 故・田和好先生

能勢の教育と文化を語る上で、決して欠かすことのできない、長年にわたり、本町の地域教育と郷土史研究の先頭に立ってこられた「能勢の師匠」とも呼べる存在です。その功績は、町の隅々にまで息づいています。

町史の編纂(へんさん)や文化財の看板設置に心血を注がれる傍ら、郷土史会の相談役として、能勢の歩みを記録し続ける重責を担ってこられました。

特筆すべきは、子どもたちへの情熱です。現在、能勢ささゆり学園で行われている地域学習の源流は、この方が先駆的に取り組まれた「古墳巡り」や「山城巡り」にあります。自らの足で歩き、本物に触れる。その体験学習のスタイルは、今も子どもたちの知的好奇心を刺激し続けています。

私たちが今、能勢の歴史を誇りに思い、学びを深めることができるのは、先輩の方々が残してくださった膨大な「知的財産」があるからです。地域を愛し、学びを広めたその精神は、能勢の教育の土台として、これからも大切に受け継がれていくことでしょう。